

『慶長五年の関ヶ原』



監 修 静岡大学名誉教授

小和田 哲男

鳥 瞰 図 板垣 真誠

資料作成 小和田塾生

発 行 関ヶ原町 地域振興課

■町長 浅井健太郎挨拶

積年の夢であった鳥瞰図の完成、今はただひたすら小和田先生を初め、関係者の皆様方のご苦勞に感謝の気持ちで一杯です。

天下分け目の関ヶ原の戦い、日本人なら知らぬ人がいないぐらいの重さをもった史実です。歴史学者や小説家などこの史実については数多の人が語っていますが、その表舞台に登場するのは、きまって東西に分かれて戦った支配階級の武将たちです。描かれる世界は功をもとめての権謀術数、仁・義・礼・智・信等の徳目、文官派と武闘派との憎しみや妬みなど、視点は実に多様です。しかし、実際に国を支えていた農民や商人達のことは描かれたものはほとんど存在しません。そこに慶長五年（1600年）当時、関ヶ原町のたたずまいがどうであったか、それを鳥瞰図で表したいという、私の秘めた思いがあります。またそのこと事態が関ヶ原合戦という偉大な史実を守り、かつ後世に伝えていくという歴史的使命を果たすことにもなると考えています。夜郎自大的な考えで恐縮ですが、この鳥瞰図の作成によって関ヶ原合戦など幾多の戦いにおいて一番の被害を被った無辜の農民などへの視点が広がればと願っています。

■監修 小和田哲男

関ヶ原の戦いが語られる時、東西合わせて約16万の軍勢が何もない関ヶ原という原野でぶつかりあったと思われがちである。しかし、そこには、人家もあり寺や社もあり、何より住民たちが汗水たらして育てた水田が展開していた。

「慶長5年（1600年）の関ヶ原の戦いがあった時、関ヶ原周辺はどのような状況だったのだろうか」という素朴な疑問からこのプロジェクトははじまった。関ヶ原町には幸いなことに、明治時代に作成された地籍図が残っており、また慶長5年に近い時代の検地帳もかなり残っていた。

これらを素材として、「道はどうなっていたか」「川はどう流れていたか」などと、関ヶ原小和田塾に集まったメンバーで討議をくりかえし、田畠の分布に至るまで復原を行い、原図を作成し、それを鳥瞰図に仕上げる事ができた。関ヶ原の戦いが関ヶ原周辺に住んでいた人々にとって何であったかを考えるきっかけになれば幸いである。

■小和田哲男先生プロフィール■

1944年生まれ。静岡大学名誉教授。文学博士、歴史学者であり、特に日本の戦国時代に関する研究で知られている。主な著書に『戦国武将』、『戦国の参謀たち』、『関ヶ原の戦い 勝者の研究・敗者の研究』など多数。

■画家 板垣真誠プロフィール■

1958年生まれ。歴史物を中心に活躍中。特に戦国時代の合戦や、城の復元に定評がある。代表作『歴史群像シリーズ』、『戦国の城』、『よみがえる名城シリーズ』など多数。

はじめに

関ヶ原合戦は、東軍率いる徳川家康と西軍の総司令官ともいふべき石田三成の軍がこの地で激突した。古文献などには、武将等の活躍する場面ばかりで、村民の様子に関する記載がほとんどない。『関ヶ原合戦図屏風』なども野原での戦況が描かれている。このように、戦場はまるで無人の原野であったと誤解されがちだが、そこには村人のくらしがあり、どれだけ両軍の兵により踏み荒らされ被害を被った事か、各村の検地帳をもとに屋敷・田・畑等を地図上に書き込んだ「原図」と『鳥瞰図』を後世に伝えようと考えた。

そこで、『関ヶ原小和田塾』を開講し、小和田名誉教授の指導により、合戦当時の各村を再現することとなった。

小和田塾名簿

		氏名	担当地区
塾長		小和田 哲男	
顧問		高木 清士	
〃		坂東 紀喜	
塾生	1班	松井 長政	今須
〃		西村 完市	〃
〃		三和 敏郎	〃
〃	2班	川崎 敏彦	山中
〃		三輪 好典	藤下
〃		高木 弘子	松尾
〃		松井 侑子	〃
〃	3班	山根 とも子	関ヶ原
〃		池側 誠	〃
〃		水向 都	〃
〃		日比 幸	〃
〃	4班	柏 憲明	大高・東町
〃		河本 章善	〃
〃		池田 ひさ子	野上
〃		岩田 やよい	〃
〃	5班	曾我 治太郎	小池・小関・玉
〃		不破 剛	〃
〃		澁谷 節子	〃
〃		加納 孝子	〃

